

# 論 説 と 話 題

## ◎ミュージックタナトロジーに思う

music thanatology …音楽死生学とでも訳すべきか、死生音楽とすべきか。近年、全国の病院で緩和ケア病棟が急増している。これは社会的ニーズが大きいからであろう。末期の患者にはさまざまな芸術療法が試みられ、音楽療法もその重要な一翼を担っている。音楽は病者に限らず、健常者にとっても癒しの効果は大きい。

かつての軍国少年であるわれわれは、卒業式に「海ゆかば」を歌ったり聞かされた世代であり、軍歌によって心を鼓舞された少年時代の思い出は同世代の人ならば忘れ去ることはないであろう。これは一種の音楽療法といえるし、教会で歌う賛美歌も、礼拝の前後に信者の気持ちが1つに結ばれ、心に安らぎを与える効果が大きいと思う。

病者も、特に終末期の病床にある人々には、身体的な苦痛に加えて、不安や恐怖、悲嘆や後悔、怒りや抑うつなど複雑な心理的苦痛に苛まれる。最近とみに盛んに言われるスピリチュアル・ケアも、そのような苦痛からの解放を目指すものである。そんななか、最近 music thanatologist の話を聞く機会があった。これは従来の音楽療法とは全く異なり、ハープを演奏しながら、末期の患者に語り掛けるのであるが、癌の末期で苦しむ人たちが、それによって安らかに文字通り眠るように人生を終えるという。したがって「癒し」というよりは、音楽によるある種の安楽死といえるのかもしれない。

一昔前なら、何となく胡散臭いと思われたで

あろう。しかし、米国モンタナ州では10年以上も前から大学院の修士コースでこのような治療に当たる専門家の養成が行われており、かなりの成果を上げているという (Chalice Repose School of Music Thanatology ; <http://www.chaliceofrepose.org/>)。昏睡状態に近い患者でも呼吸や脈拍も安定するとか、ジョンズ・ホプキンス大学の研究者も参加して、医学的、生理学的効果が裏付けされている。そして、そのコースの卒業生が世界の各地に赴いて活躍しているという。

先日来日した Carol Sack 女史もその1人で、東京など日本各地でボランティアとして演奏活動をしている。特異なのは単なる楽器の演奏だけでなく、歌うような語り掛けがなされることである。実際に聴いていると、不思議に気持ちが安定し、子守唄を聴いているような感じで眠くなるのであった。日本でも緩和ケア病棟で、このような領域の新たな展開が期待される。

ところで少子化日本では、子育て支援が声高に叫ばれているが、一向に歯止めがかかる兆しはなく、人口減少社会は必至である。むしろ大切なことは生まれてくる赤ん坊をいかに脱落させずに、創造性豊かで忍耐力のある子どもに育てるかであろう。最近の子守唄を聴いて育つ赤ん坊は皆無ではなからうか。それがいわゆる“キレる子どもたち”の増加につながり、また少年の凶悪犯罪や、心身症の増加にも関係があるのではないか？ 子守唄のような乳児早期における音楽を通じての親子の心の触れ合いが、ターミナルケアに劣らず、人生の出発点においても重要な役割をもっているのではなからうか。music thanatology を通じて感じたことであった。

(鴨下重彦)